

元代の中・蒙対訳語彙『至元訳語』

『長田夏樹論述集（上）』第2章

（原載：『神戸外大論叢』第4巻第2・3号，1953年10月）

この論文は、元代に刊行された類書『事林広記』（陳元靚編）に収められている『至元訳語』（『蒙古訳語』とも）のモンゴル語と中国語に関する論考である。明代の中国においては、『華夷訳語』をはじめとして、モンゴル語を漢字音写し、多くの場合意味によって分類した体裁の数種の蒙漢対訳語彙が編纂されてきたが、『至元訳語』は、それらに先立つものとして、モンゴル語研究においても重要な資料の一つである。

本論文の中核を成すのは、石田幹之助（1934）「至元訳語について」（『東洋学論叢』第一冊所収、また石田幹之助 1973『東亜文化史叢考』財団法人東洋文庫所収）の校本を踏まえつつ、テキスト中に極めて多い誤記誤刻を正し、異体字を整理して作成された校本の部分、及び全項目に対してなされた語釈の部分である。語釈においては、蒙古文語に対応する形式を見出しうる場合には蒙古文語を記し、そうでない場合は『華夷訳語』『元朝秘史』などの漢字表記モンゴル語文献や現代蒙古諸語（方言）、更には満洲・ツングース諸語やチュルク諸語などから同源と目される語を引いている。それでも少なからぬ項目が空欄になっているのは、開拓者の仕事として致し方ないところであろう。現在では、Louis Ligeti と G. Kara による語釈（*Un Vocabulaire Sino-mongole des Yuan: le Tche-Yuan Yi-Yu, Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 44, 1990）や、Ü. Manduqu（烏・満都夫）《*Mongyul i ioi toli bicig*（蒙古译语词典）》（1995）などの研究により、より多くの語彙項目が解読されている。

語釈に劣らず重要なもう一つの仕事は、服部四郎（1946）『元朝秘史の蒙古語を表はす漢字の研究』（龍文書局）の考察及び方法論を踏まえつつ、全ての音訳漢字に対して独自の元代推定音を付したことである。このような作業は、『至元訳語』をモンゴル語史のみならず漢語史の資料としても位置づけようとする作者の姿勢の表れであると言える。

そうした姿勢を受け、論文では、『至元訳語』の音訳漢字の性質について、それが明代前期の『元朝秘史』『（甲種本）華夷訳語』とは異なり、『元典章』『輟耕録』『長春真人西遊記』などの元代資料や『元史』などに見えるモンゴル語表記漢字と共通することを、「哥」「可」「葛」などの例を挙げて示し、さらにそれが元代と明代の漢語の音韻体系の違いの反映であることに言及している。このほかにも、中古匣母字の一部の声母音価を[ɣ]に推定するなど、元代漢語の音韻に関する作者の知見が窺われる箇所がある。

資料中のモンゴル語の性質については、月名などの特異な語彙や、h- の保存を初めとした音韻面での諸特徴を、簡潔な箇条書きながらも、例を挙げて指摘している。（更科慎一）